

終戦と放送

迫水久常

参議院議員／終戦時の内閣書記官長として終戦工作に尽力し終戦詔勅を起草。戦後は政界に進出し、
経企庁長官、郵政大臣などをつとめる。

藤樫準二

毎日新聞社友・編集局嘱託／大正九年万朝報入社以来宮内省記者として取材にあたり、宮中の盛儀
にはとくに招かれるという宮廷記者の長老。

山岸重孝

日本大洋海底電線常務取締役／内閣情報官をへてヨーロッパに在勤、終戦時は内閣情報局放送課長
として放送の責任者。玉音放送収録にも立ち合う。のち電電公社理事。

春日由三

日本音楽著作放協会理事／昭和十年以来、NHK各部門の番組の企画制作を担当。終戦時には陸
軍省との連絡係として取材にあたり、反乱軍の放送所占拠には説得に赴く。

神谷勝太郎

NHK国際放送の開始以来、この分野で活躍。終戦時は海外局亞洲部副部長として、終戦前に「ポ
ツダム宣言受諾」ニュースを放送。のち国際局編成部長。

島浦精二

司会。NHKアナウンサー／ロサンゼルスオリンピック大会の「実感放送」で有名。

島浦 終戦と放送をテーマに座談会をするとすると、直接八月一五日にいつてしまふよりは、やはり八月六
日の広島への原爆投下あたりから話しをはじめて、ソ連参戦、ポツダム宣言受諾決定の閣議など、順を追っ
ていったほうがわかりやすいと思う。迫水さんは当時、鈴木貫太郎内閣の書記官長(いまの宣房長官)をされ
ていて、広島被災の報告後、すぐに仁科芳雄博士を調査に派遣なさっていますね。

迫水 仁科博士から「広島に落ちたのは原子爆弾です」という報告を、九日か、一〇日に受けた。仁科さん

が出発したのは七日で、その飛行機が広島に着かないで途中でおりて、八日に向こうへ着いている。私のところへ原子爆弾という最初の報告は八日の夕方、陸軍を通してきたんだね。そして鈴木総理が終戦を決する段どりとなったんだ。

春日 サイパンからの放送が、あの晩からアトミック・ボムということばを、ジャンジャン使っていましたね。

神谷 それを受けて国際放送では「アトミック・ボムで市民が大ぜい死んだ。残虐だ」という打ち返しをやっていたんです。

藤樫 国内では「新型爆弾」という表現でしたな。

迫水 政府の発表には、原子爆弾というのはついに出てこない。詔勅の時にも「残虐ナル爆弾ヲ使用シテ」と書いたな。

山岸 情報局のわれわれのほうも、かなり早くアトミック・ボム 原爆だということがわかりました。それをどういふ表現にするかで大騒ぎをやっていましたよ。

島浦 六日以降の放送は、ニュースのほかにはやっぱり演芸もやっていたの。

春日 もちろんやっていました。姿三四郎とかいろいろやっていました、空襲警報のたびに切れていたわけです。

ふたつの談話 ポ宣言受諾決定まで

迫水 放送局が一番苦労したのは一〇日の陸軍大臣談と情報局総裁談でしょう。実は陸軍大臣談が出るということがわかって、久富達夫情報局長に何とかやめさせなさいと言ったんですが、どうしてもできなかつ

た。

春日 ぼくはその時、NHKの高橋武治報道部長の机の前にいたんですが、高橋さんはそりゃ往生したんですよ。

山岸 その電話を、高橋さんから受けた私も、あの時ぐらい弱りきったことはなかったんです。

迫水 もう一つ、八月一三日午後四時に、大本営発表という二セモノが出たんですよ。「皇軍は新たに大命を拝し、米英ソ支四力国に対して作戦を開始せり」というのが、新聞社や放送局に渡って、午後四時に発表せよということだった。三時一五分過ぎごろぼくのところへ告げてきた朝日新聞の若い記者は、政治部長が、こういうものがきているが書記官長が知っているかどうか耳に入れておけといわれたというので、閣議の最中呼び出された。戦争をやめる方向へ行っているのにね。これを書かれたのは、自決された親泊朝省大佐ということになっています。

春日 家中で死なれましたね。りっぱな人でした。

迫水 何とひどいことには陸軍大臣、参謀総長がその書類を決裁している。それでぼくが大臣に話したら、知らんという。総長も知らない。だから、いかに当時の陸軍というのが紊乱びんらんしていたかだね。

島浦 八月九日の夜から一〇日の暁にかけて御前会議があり、大激論がたたかわされてポツダム宣言受諾が内定した。そうすると、この結果をどうして全国に知らせるかが問題だ。下村総裁がそれを談話の形で放送しようとしたら、主戦派の陸軍も阿南陸軍大臣談話で対抗したというわけですね。

迫水 まだ御聖断くだが下ったというわけにいかないから、国体が護持せられ、皇土が保衛せられたら、それで大東亜戦争の目的は達したんだというような、漠然とした趣旨の情報局総裁談を放送するつもりだったのに、あくまでたたかうという陸軍大臣談が出た。実際困ったね。

春日 NHKが一番困ったのは、情報局総裁談は七時のニュースのトップという指定だから、やることにきめていたところ、阿南陸軍大臣の全く正対な徹底抗戦の談話が出てきて、しかもそれに陸軍報道部から人がきて、高橋報道部長の机の前で監視している。その前で高橋氏が情報局の山岸さんのところへ電話をするわけですよ。

編集部 高橋さんの話では「NHKは情報局の命令によって総裁談話がトップなので、この順序を変えることは、情報局の許可がなければできないんだ」ということで突っぱねたら「じゃあ情報局へ電話をしろ」という。山岸さんとやりとりしていたら、「その電話を貸せっ」というわけですって、山岸さんといふやって陸軍大臣談話がトップへきたらしい。

山岸 そうです。とにかく当時の陸軍というのは無茶苦茶でしたからね。

春日 彼は七時のニュースのトップに阿南さんの談話が出たのを見届けて帰った。それで九時のニュースでは順をひっくり返して、情報局総裁談をトップにした。

神谷 海外放送では、阿南陸軍大臣談話は全然出さなかった。下村総裁の国体護持の談話は、日本語放送だけをやったんです。

春日 一日の各新聞には、両肩に並べて出ている。便利だなと思いましたがね(笑)。ラジオはどっちか先やらなければならぬ。

島浦 一日の海外放送でやったポツダム宣言受諾のニュースは、やっぱり情報局から出たのですか。

神谷 私はあとで武藤義雄さん(当時のNHK海外局長)に短波で受諾放送をするというほんとうの発案者はだれだと聞いたんですよ。東郷外務大臣、松本俊一次官といろいろ出たんですが、どうも迫水さんじゃないかということを書いていましたね。

迫水 私はあの時第三の原子爆弾が東京に落ちてくることを非常に心配していた。落とされないためには和平工作が進行中という状態を見せなければならぬ。たまたま高等学校の一年下の同盟通信海外局長の長谷川才次君(現時事通信社長)に指示したら、長谷川君がそれを放送にも伝えたい。そういう意味で外務省はあまりあの海外放送には関係なかったんじゃないですか。

山岸 外務省では、コミュニケーションについてたいへんくわしかった太田三郎氏(当時外務省情報課長)がある程度動いておりましたね。それをきめたのは松本次官を中心とする外務省の幹部でしょう。

島浦 一〇日の朝、外務省はスイスとスエーデン駐在公使あてに訓令を出していますが、内容はそのようなものですか。

神谷 そうでした。太田さんが長谷川さんのところへ最初に行つて、トンツー(対外無線情報)で打ってもらった。その足ですぐNHKへきて武藤局長に会っているんです。あの時は打つということを知っていたのはせいぜい四、五人なんです。ニュース係満潮英雄君があれを書いて、アナウンサーに読ませると広がっちゃうので、彼がアナウンスした。日、英両語をつかっています。その原稿はコピーも何もとらず一枚だけのやつを、彼の引き出しに鍵をかけて入れておいたんですが、翌日から憲兵がきてだいぶせめられましたから、彼はこわくなって上司の山崎勇氏(のちNHK報道局長、故人)に渡し、彼は家へ持って行って焼いた。私の記憶では夜中にやったような気がしていたんですけれど、あとでトルニマンの『メモアール』を見ますと、ワシントン時間の八月一〇日午前七時三三分にラジオ東京を傍受したというんです。それから逆算すると、日本時間では一〇日の晩の八時三三分なんですよ。

編集部 そうすると情報局も外務省も内閣も、直接NHKには「海外放送で、ポツダム宣言受諾というのを
出せ」とは言っていなかったということですか。

神谷 はい。正式命令じゃないですね。

春日 同盟のトンツーを使おうとでかけたら、同盟で海外放送を合わせて使ったほうがいいと知恵をつけたんでしよう。

迫水 同盟のトンツーは、情報局の事前検閲がなかったしね。だから検閲のきびしいNHK海外放送がそれを出したのは、大へんな勇気だったと思うな。

神谷 その晩に、南方総軍で怪放送だということまで文句がきて、翌日から憲兵隊につけまわされました。

山岸 親泊大佐には「けしからん、ぶったぎる」と血相かえてどなりこまれましたよ。しかし、その頃はもう軽井沢の抑留外人なんかは、日本がまけたと威張っちゃったし、スイスでは道で人びとが踊りまわったそうですからね。

玉音放送は誰れが 終戦の詔勅ができるまで

島浦 終戦のいろいろな記録を読んで一つ考えたことは、だれが終戦に当たって天皇陛下に“玉音放送”をやっていたかどうかと立案したんだろうということですね。八月八日に下村宏情報局総裁が参内して拝謁して、二時間のあいだ陛下と単独でお話ししている。その時に上奏したのじゃないかということにもなっているんです……。

山岸 あの方は朝日新聞におられて、新聞人としての一つのキャリアというものを持っておられたし、その時の情報局の次長が久富達夫さんで、毎日新聞出身ですし、お二人でもっと国民に真相を知らせなければいけないということ、かねがね言っておられました。なかなか軍はいうことを聞かなかったんです。下村さんとしては国民に真相を知らせるといふことと、いざとなったら陛下に放送にお出まし願わなければい

うことを、お話し申し上げたといわれていました。玉音放送収録後狭い部屋に押し込まれていた時に、私は下村さんを扇子せんすであおいであげていたんですが、その時にふるしき包みを持っておられて、そこから紙を一枚ずつ取り出してはこまかく破いておられました。しばらくして「便所に行きたい」というと兵隊がついて行く。なかなか帰ってこられないので、非常に心配しました。解放されてから伺いましたら、あの方は非常にたんねんに記録をとっている方ですから、破いた紙は自分が陛下にお話し申し上げた内容を書いたもので、軍部の連中に見つかったら、陛下にご迷惑がかかるということをおそれて破いたんだということでした。

島浦 下村さんはその前に二年間NHKの会長もやっておるので、これで、その話が結びつくんですよ。

藤樫さん、陛下側近の方々の中でそういうことを陛下にすすめられたという話は……。

藤樫 ありますね。私の取材したところでは、下村さんと木戸内府(幸一氏、内大臣)の合作じゃないか。最後の決断は木戸さんのほうが強かったんじゃないでしょうか。

迫水 われわれは八月一四日の御前会議の席上で、初めて陛下から放送してよろしいとおっしゃったので、非常に恐懼きょうくしたんです。ですから、下村さんもそういうお考えでおられたとは思いますが、知恵をつける人があつたとすれば、木戸公爵がつけたんだと思いますね。

山岸 八日に下村さんは、国民にもっと真相を知らせなければいけないということをし、主としておっしゃったんじゃないかと思えますね。

島浦 「木戸日記」の八月一日には「三時石渡宮相を居室ニ訪ヒ、ラジオニテ御放送被遊あそばテハ如何トノ意見ニツキ懇談ス。三時五五分ヨリ四時五〇分迄拜謁、ラジオノ件其他ヲ言上ス」とありますね。

迫水 そうです。それで木戸内大臣は五時に石渡宮相に、陛下がいつやつてもよいとお考えだと伝えていらっしゃるんです。それをうけて玉音放送をやるときめたのが、一四日の午後の閣議ですよ。それなら書記官長原稿

を書けということ、ぼくは口語体で書こうと考えて、ペンをとってみたけれども、どうにもならなかったのは一人称です。このごろは「私は」とちゃんとおっしゃるけれども、その当時は「朕ちん」とおっしゃる以外には陛下が自分のことを一人称で公式におっしゃることはない。その次に困ったのは「爾臣民なんじ」という二人称。これは「お前ら」とおっしゃるのか「国民諸君」とおっしゃるのか、見当がつかない。一人称、二人称なしで書くわけにいかん。詔勅を読んでいただく以外に方法はないという結論を出して、ぼくは鈴木貫太郎総理の了承を得たのです。

島浦 その内容は一〇日の御前会議で陛下がおっしゃったことを中心に……。

迫水 一四日のおことばも多少補充しましてね。

島浦 それをもとに下書きをさせた。

迫水 木原君、通雄氏、のち電通ラテ局次長、故人に私が書き流したものを、清書させるわけですよ。彼は文章家だから、「書記官長、ここところはこうしたほうがいいですね」ということはいいましたね。しかし、御前会議で陛下のおことばを聞いたのは私なんだから、それを下請させるわけにはいかない。

春日 木原さんは内閣の囑託ですか。

迫水 彼は最初から文章を書かせるために、私が頼んだんです。彼に、きみの書いた文章の中で、何が一番自信があるかと聞いたら、終戦の時に出した内閣告諭だということでした。これは彼が下書きして、私が手を入れた。

春日 そうか、巷間の話は告諭と一緒になっているんですね。

迫水 正規の内閣囑託は川田瑞穂先生なんですよ。安岡正篤さんは迫水久常個人のアドバイザーとしてきてもらったんです。

島浦 「万世ノタメニ太平ヲ開カムト欲ス」というくだりは、安岡さんがつけ加えられたわけですね。

迫水 ぼくは「永遠の平和を確保せんとす」と書いたんですよ。そうしたら安岡さんがこれはきわめて日本語的漢文だ(笑)。宋の張横渠の文章の中にある「万世のために太平を開く」というのを使ったんです。

島浦 その詔勅はいつできましたか。

迫水 一四日の夜八時半ごろです。それまでは案をめぐってなかなかまとまらない。議論が生まれてね。

山岸 そうでしょうね。私も午後三時には宮内省におれ、ということまでまいりまして、それこそ待てど暮せど音沙汰なしですよ。おいしい晩ご飯を出していただいてじっとみんな待っていた。

春日 NHKから宮内省さしまわしの車に、大橋八郎会長以下の録音班がのって出かけたのが三時ぐらいでした。

迫水 八時ごろ原稿を全部作成して、佐野内閣書記官が清書したわけですよ。清書してからまず天皇陛下のところへ持って行って、御名御璽をいただくわけです。その前に原稿をタイプライターで打ったものを一応、宮内省の待従職を経て陛下の御内謁は願っておいた。そういう連絡は、ひんぱんに行なっていましたね。「臥薪嘗胆」ということばを一部で強く主張されて、私はそれに反対して、議論していた。これは復讐を前提とすることばですからね。

藤樫 内閣側ではそのあとどうしていたんですか。

迫水 清書して御名御璽をいただいて公布の手続きを終わったのが午後一時ですよ。だから終戦の御詔勅の日付は八月一四日なんです。発表だけは八月一五日でしょう。実に異例なことですがね。深夜にこういうことが発表されることは、治安工作上とても困るからと阿南陸軍大臣がいう。大臣は自決して陸軍に無言の鎮圧を与えるまで待ってくれという意味だったんでしょうね。いまから考えると……。鈴木総理は陸軍大臣が

そうおっしゃるんだから、そうしましようといっておられた。

とりなおし一回 “玉音”の収録おわる

島浦 機械を持って参内したら、蝉時雨せむしぐわが非常ににぎやかだったといふんです。

ここで立ち合った人の名前を出しておきましょう。石渡宮相、藤田尚徳侍従長、下村情報局総裁、加藤祐三郎第一部長、山岸さん、川本信正秘書官、NHKからは大橋八郎会長、矢部謙次郎国内局長、荒川大太郎技術局長、近藤泰吉現業部副部長、それに技術者として長友俊一、春名静人、村上清吾、玉虫文一の四氏。さらに三井・戸田・徳川・入江の四侍従がいる。陛下がいよいよ録音される時に「テストをしなくてもいいのか」というようなことを、ちょっとおっしゃったそうですね。

山岸 ドアを開いておりマイクも生きていましたし、陛下の生なまのお声も聞こえたんですよ。しかし、テストをしようかとおっしゃったことは、ちょっと記憶にない。ただ、第一回の録音をなさったあと、いままでよかったですか、もう一回やろうかとおっしゃったことはございました。

島浦 その前に声が陛下に似ている戸田侍従が新聞なんかを読んでマイクテストをやっている。

迫水 御前会議の時に阿南さんが泣きながら陛下のお袖にすがって「陛下、お待ちください」と言ったなんという話が伝わっているでしょう。そんな場面なんか全然ないんですよ。それに比べると、陛下が「テストしようか」とおっしゃったことのほうが自然だね。

藤樫 テストとか何とかということとはよくご存じですよ。「これでいいのか」とおっしゃったのは、本当だと思いますよ。

迫水 「テストをしてくれ」というのは陛下のおことばとしてちょっと品が悪いな。放送局の職員のこと

とばだよ(笑)。

島浦　そして下村総裁が進み出て頭を下げる。荒川局長の目くばせが合図で収録。終わると、「どうだったか」といわれた。五分間ぐらいだそうですね。一回おやりになって陛下ご自身ややご不満だったということですね。

山岸　お声にふるえがあったんです。それで技師のかたも「おことは不明なところがある」といわれた。陛下も下村さんに「いまのは声が低かったからとり直しをしよう」ということをおっしゃいました。

島浦　収録の技師としては、どうしても二つはとりたかったんでしょう。ですから待っていましたとばかりにお願ひしたんだと思いますけれども、そうしたらまた三度目をもう一ぺんやるとおっしゃったそうですね。

藤樫　それは私も石渡さんから聞きました。もうよろしゅうございますと陛下にすぐ申し上げたそうですね。

山岸　私も隣りの部屋で泣きながら聞きましたが、陛下のお声のトーンの高低がひどいので、うまく録音がとれるのかと心配しました。

春日　だから、技術者はおそらく何度でもとりたかったんでしょう。

島浦　陛下が玉音をとられた時は、陸軍の軍装ですね。そして陛下のうしろには獅子の絵屏風があったとい

う。
山岸　準備している時に、陛下のお立ちになる部屋と録音設備のある部屋とを、行ったりきたりしましたから、よく覚えていますが、獅子の屏風はありましたね。

二つ折りの屏風で、その前にお立ちになって放送されますかとお伺いすると、立っておやりになるということでスタンドマイクを立てたと思います。

藤樫　雄壮な屏風です。いまでも陛下のいらっしやるところにありますよ。

島浦 マイクホンもわざわざスタジオで使っている一番いいやつを、係とけんか腰で持っていったというんですから、もしとりそこなったら腹切りものだったろう。

山岸 それはほんとうに必死ですよ。ですから、あのあとすぐその場で再生して試聴をしています。陛下は帰られた。もう一五日になった頃です。

“私語を禁ず” 監禁された録音班

迫水 ぼくのほうは、録音を終わりましたということ、ああよかったなと思って、それからあとは連絡がないんだから、その後、収録の人たちがつかまってひどい目に会っているなんていうことは全然知らないんだ。

そのころ、総理官邸が襲撃を受けて、機関銃を撃ち込まれたんです。私は地下道を通って脱出して、警視庁へ行ったら、警視總監がどうも宮内省との連絡が午前一時ごろからつかないという。それでぼくは初めて山岸さんたちが監禁されたことを知ったんだ。

神谷 あそこで録音盤がなくならなかったのが、奇跡みたいですね。きょう大橋八郎さんが亡くなられましたが、下村さんも大橋さんも、衛兵所に入れられたんですか。

山岸 ええ。宮内省の加藤総務局長とか順々にみんな連れてこられちゃうんです。とにかく一七、八人そこへ入りました。初め、中尉ぐらいの人が一枚の罫紙を出してみんなに「ここに位階勲等氏名を書け」といいます。それから「私語を禁ず」といわれました。録音をしたあと、その録音盤をどうするかという打ち合わせは、ろくろくわれわれはやっていなかった。結局恐れ多いということで、宮内省へお預かり願おうということでした。

春日 矢部さん(謙次郎氏)は「何か不穏なことが起りそうだと思って宮内省に置いてもらうことにした」というような話を生前にしていましたかね。

島浦 しかし、あそこに置いてくるところが非常に自然なんですよ。

山岸 録音がいへん予定よりおそくなってしまうと、一時過ぎてやっとこれからということで、終わったのは一二時近かったと思います。みんな恐れ多いからという感覚で、録音盤を侍従に渡して急いで退出して、宮内省のあの建物を出たとたんに、空襲警報のサイレンが鳴ったんです。

春日 一四日の晩に、五つの都市(熊谷、高知、小田原、秋田、福山)がやられたんですよ。

山岸 ええ。自動車の置いてあるところまでちょっと歩いて、車に乗って坂下門を出ようとしたところ、バラバラと兵隊が「止まれーっ」ときた。録音が行なわれてその時間まで三〇分そこそこだと思えますね。だから、どう伝わったんですかね。

春日 それが疑問なんですよ。陛下が録音をとられたということが、どうして兵隊にわかったんでしょうね。山岸 その晩、たしか七時ごろのニュースから、あした重大放送があるということは出しました。私どもは宮中でも、その予定をいつにするかとか、いろいろ連絡をとっておりましたよ。

春日 七時一二分ぐらいに和田信賢アナが重大放送を予告してますね。

島浦 その重大放送ということや、前からいろいろ動きがあるので、何か感じいたんじゃないかと思うんですよ。それと録音をとるために放送局からゾロゾロ行っていることだと思っんです。

山岸 あの元凶はいまだによくわかりませんが、あの一派の人たちは、われわれが録音盤を持って退出するんじゃないかと考えていたと思います。

迫水 情報局の中に、親泊大佐など陸軍報道部の連中もいるわけですからわかっていたと思いますね。

藤樫 宮内省には侍従武官というのがありましたが、あれは陸軍省のイヌと言ってもいいでしょう。そのあたりからもれたんだと思いますね。いつも陛下が悩まされておったのが侍従武官長なんです。これは陸軍のまわしもので、陛下が何回かおしかりになっても、ごもっともでございまして、本旨はとりっがなかつた。

島浦 矢部国内局長が連れてゆかれて、宮内省の録音した部屋へ案内して、一芝居しているんですね。「盤は侍従に渡したからどこにあるかわからない」とか「侍従ははじめて会ったから名前は知らない」などさまをこめた銃の前で言っているんだね。これもたいへん勇気のあることだ。一度戻されて、またさがしに連れ出されている。

編集部 録音盤保管は徳川侍従で、皇后宮事務官室の軽金庫に入れ、書類でそれを埋めたあと、侍従室で仮眠して、事件を知り、お文庫に報告したあと、将校によびとめられ押し問答していたら、「斬ってしまえ」といわれたそうです。

「斬っても何にもならんだろう」といって、結局なぐられただけで無事だった。これでいよいよ一五日の朝が白みはじめるんですね。

陛下も泣かれた 玉音の放送をきく

迫水 一五日に午前一〇時半ごろ宮内省の玄関を上がって行ったら、加藤総務局長が上からおりてくる。私と高等学校の同級生なんだ。雑囊ざつのうのようなカバンをちよっと押さえて「おい、これから放送協会へ持って行くんだ」というので、ぼくは大いに感激して「しっかり頼む」と雑囊ざつのうに最敬礼したんですが、あとで聞いてみると加藤は何も持っていないのね(笑)。

春日 陽動作戦ですね。

迫水 うん。筧課長(素彦氏、当時宮内省総務局庶務課長)が別な口から本物を持って行っているんだよ。

島浦 ああいう時の作戦というのを、非常によく心得ておられた。録音盤は二組のを別々にしまして一組のほうは袱紗(ふくさ)をかけて正々堂々と持ってきて、これは予備なんです。片方のほうはちゃんと隠して持ってきたんです。終戦の御放送を陛下はお聞きになっていたんですか。

藤樫 ご自分の声をラジオで聞いて陛下は泣いておられました。ちょうど枢密院本会議があり、大本営の地下室で平沼騏一郎さんも出て、ポツダム宣言受諾の報告をされ、それが本会議にかけられたわけです。時間がきましたから会議を中断して、平沼さん以下大本営の入り口の廊下に整列しました。陛下は会議室から出られ控室へお入りになりました。そこにはラジオが持ってきてあった。海軍の関係者が無電技術を担当しておったんです。

陛下のお聞きになったラジオは、グアム島の占領品で、RCAビクターの小さなラジオで、グアム一七〇号と銘うってあった。廊下のドアが少し開けてありました。最初懸念したのは地下室ではたして電波が入るかどうかということだったんですが、入ったんですね。枢密院会議ですから侍従武官はおらず、前行する人とあとからつく三人の侍従が陛下のおそばにおり、陛下はラジオを聞きながらうつむいておられ、廊下のご老人連も嗚咽(おえつ)していました。

皇后さまはお文庫におられました。皇后陛下がお聞きになっていたラジオは、真黒なものでした。社にもどろろとしましたら、二重橋の上は夕日が真赤で、いい天気でした。その時はまだ、写真に出ているように、あんなにたくさん人は出ていなかった。

春日 あの録音がなくなっていたらたいへんでしたね。ナマ放送か、アナウンサーが詔勅を読むんだろっけ

れども、もっと混乱したでしょう。

藤樫 ええ。当時は、これはニセモノだとかいう話がずいぶんありましたね。

島浦 私はジャワでその放送を伺ったんですが、短波ですからよくわからないんですよ。聞きながら、やるんだという参謀もあるし、いやだめだというのもあるし、はっきりしないんです。あとで和田信賢アナウンサーがくりかえしていますね。こちらは和田君だとよくわかったんですが、参謀連中は、そいつは連合軍につかまった謀略放送だという(笑)。

春日 あのころは終戦まぎわで中継線の規格はうんと悪くなっていて、国内でもわからない。

山岸 日本内地でもほとんど有線はズタズタで、短波でやったんですからね。迫水さんはどこで玉音放送を聞かれたんですか。

迫水 総理大臣官邸ホールで、職員一同と一緒にです。詔勅は自分で何べんも書いていますから暗誦しているでしょう。陛下のおことは次は次は何が出るか、そのとおり出てくればいいがと思うような気持ちで聞いているわけだ。涙がボロボロ出ましてね。

神谷 NHKでは、みんな第一スタジオへ集まってあれを聞き、部屋へもどって窓から表を見たら、NHK前の広い電車通りがいっぱいになっていて、電車もとまっているし、みんな泣いている。スピーカーを出したんですよ。あの騒ぎのあとの警備にきた兵隊(後出)まで泣いていました。

迫水 ぼくは放送を承って書記官長室へ帰った。わけのわからない涙が出てくる。これで戦争が済んでもう死ぬことはないんだが、運命の神様がもうちよっと日本ががんばったら神風でも吹かしてやろうと思ったのに、鈴木貫太郎とか迫水久常なんていうのがむやみやたらにあわてて戦争をやめるから、どうにもならんじゃないかと言ってやしないかと思って、いても立ってもいられないんだ。それで、ぼくが自分自身に言い聞かせ

たのは、陛下の思し召しで戦争を終結したことに間違いがあるわけがないということなんです。

編集部 この間、宮内庁の入江侍従次長に取材したら、紀元二六〇〇年記念の式典で陛下のお声を放送したいという申し入れをNHKがしているんです。そうすると当時宮内省では、やってもいいだろうというのと、だめだということの半分に分かれたというんです。すると大益次郎さん(当時宮内省事務次官)がその時に「陛下の放送というのはいまやらなくて、もっと先に必要な時があるかもしれない」ということを言われている。そのあと大金さんにも取材に伺ったら「いやア、私が言ったかどうか」といわれるんですが、その辺で安直に出していたら、八月一五日みたいな本番ではだめだったろうということなんです。

山岸 そうでしょうね。玉音放送のあと、和田さんが前ぶれで詔書奉読、内閣告諭、「聖断」の経過、外交文書交換の要旨、ポツダム宣言の要旨、カイロ宣言の内容、八月九日以降の重要会議の経過など三七分に分けてやっておりますね。

神谷 これは東亜中継放送によって、在外将兵や邦人にも同時放送されて、敗戦を告げたわけです。

春日 かなり長いあいだ玉音の録音をかけたスタジオがわからなかった。ああいう録音をかけられる部屋はNHK本館二階の日本間のスタジオの副調にきまっていた。一番いい録音機があったんだから……というので「終戦放送記念スタジオ」というプレートをつけてあるんです。

放送会館を一時占拠 キラ星のごとく並んで「玉音」の再生

島浦 放送会館も一五日の午前四時ごろ反乱軍の別の一隊に占拠されたんですね。宿直していた連中は第一スタジオに監禁されている。ここで保木玲子という技術員に「放送させろ」といったら「東部軍情報の出ている間はできませんよ」といわれ、館野アナウンサー(守男氏、現NHK国際局長)にピストルをつきつけて

放送を強要したが「東部軍管区と連絡が必要だし、技術と打合せしなければ……」といって時間をかせがれているんですね。これは近衛第一師団長を射殺してにせの命令を出した畑中少佐の中隊なんでしょう。

春日 放送局占拠をしようだという情報は一四日の夜にはわかっていたそうです。だから、時間をかせいでいる間に、会館と川口・鳩ガ谷両放送所への連絡を切っていますよ。だから、もし、彼らがマイクをとっても放送は出なかったはずだ。

山岸 それで七時二分からは、館野アナウンサーが玉音放送の予告をなさっていますね。私もは一時に、放送会館二階のスタジオ(第八スタ)に並びました。

島浦 キラ星のごとく、と資料にありますね。入口は憲兵が固めた。玉音盤は高橋報道部長が会長室から紫のフクサをかけた桐箱に入れて持ってきた。

春日 それを渡されてかけたのは録音再生の名人だった木村竜蔵君(現NHK中央研修所囑託)だ。

山岸 そのとき、もしこれが終戦の放送だったら、その盤をたたき切るといって刀に手をかけた人がいるんですよ。

春日 話が戻るけど、一五日の朝はほんとうに警報が出ていたので、現実問題として東部軍の許可がなければできなかった。現実にそうだったからいえたんだ。うそを言って、口づらを合わせたわけじゃないんだよ。島浦 その時に占拠されたNHKの中を朝倉という少年が抜け出して第一ホテルへ行って高橋報道部長に連絡している。そこで高橋さんは、森永武治(現劇作家)という宮内省にもと勤務していたNHK職員を宮内省へやった。その時に朝倉も一緒にやった。

春日 私はそれを知っていたから、一四日朝に川口と鳩ガ谷放送所が反乱軍に占拠されたとき、宇田道夫君(フジテレビ顧問)と行く時に朝倉を連れて行ったら、大きなカバンをぶら下げて、「月給を持ってきました」

とって中へ入っちゃったんですよ。朝倉は、戦後間もなく亡くなりました。報道の坊や(給仕)で、勇敢なやつでしたよ。

島浦 この時も平野、蒲生という鳩ガ谷の所員が、言を左右にしている間に送電を切り、機械故障だといって拒否した。そのまま占拠されてお昼ごろにひるめしに行くといって脱出した所員が大宮憲兵隊に急を知らせている。どうも放送局の連中は言を左右にするのがうまい(笑)。

軍隊まで静まる 八月一五日午後から

島浦 一五日の放送を聞いた時は、みんな泣きましたね。そのうちひしがれた国民が、だんだん立ちなおっていくわけですが、一六日以降は徐々にどんな放送をやっていたのですか。

春日 とにかく国民を力づけ、立ちなおるような放送をしなければならぬ。何から始めようかというので、一番先に朗詠をやったと思いますね。それから一七日の晩に天気予報が三年ぶりに復活した。その天気予報一つが、あらゆる娯楽番組に増して、平和になったんだという感じがしましたね。一六年一二月八日からやっていなかったんですからね。

神谷 一五日の午後一時に総理の「大詔を拝し奉りて」があり、アナウンサーが夜まで繰り返してましたね。また三時には阿南陸相自刃のニュースと辞世の和歌が放送された。

編集部 一五、一六日は時報とニュースのみ放送で、一七日になって、天気予報……。ここで東久邇内閣ができて首相の「大命を拝して」というのがあります。首相は八月二〇日にも「軍人その他の軽拳な行動をいましめる」というのを夜の七時から一二時までの各時間の冒頭に反復放送で、六回やっていますね。そのほかに、千石興太郎農商相が「全国農民諸君へ」というので、一生懸命食糧増産をやれということを送して

いる。

春日 それから電波管制もとけた。「昼間送電をいたします」というアナウンスがあったね。

迫水 ぼくは終戦時には放送が一番大きな役割をしたと思うね。終戦の閣議が始まってから御聖断があって、向こうの返事がきて、平沼騏一郎さんが、日本の天皇の地位というのは、国民の意思以前の神ながらのものであるのに、国民の意思によってきまるということは国体の変革であるから、日本の国体ももう少しよく説明して、正確なる返事を求むべしという。

春日 それは陸軍が喜んだでしょう。

迫水 それはもう……。これを機会に戦争を巻き返そうとした。東郷外相は、いくら言たって神ながらのことを、アメリカ人がわかるわけがないという。それで調査が長びいたんですよ。その間の時をかせぐの非常にラジオ放送というものが役に立ったということが第一点。

そのつぎに、天皇陛下の玉音放送によって、国民も、軍隊までも静まったんですから、いかに放送の影響が偉大であるかということですね。

島浦 混乱の時に放送があったら、という例が関東大震災で、反対に大混乱を放送が救ったといえるのが玉音放送だといえましょうね。しかも旧帝国憲法は天皇の意志を絶対のものとしながら、実際はそうでなかった。それを帝国憲法の最後の時期になってまず終戦がきまり、玉音放送と、陛下のご意志が通ったことは意味ぶかいことだと思っんです。

“玉音放送”の予告アナウンス

「つつしんでお伝えいたします。賢きあたりにおかせられましては、このたび、詔書を煥発あらせられます。(間)賢くも天皇陛下におかせられましては、本日正午おんみずから御放送あそばされます。まことに恐れ多き極みでございます。国民は一人残らず謹んで玉音を拝しますように。国民は一人残らず謹んで玉音を拝しますように。(間)なお、昼間送電のない地方にも、正午の報道の時間には特別に送電いたします。また、官公署・事務所・工場・停車場・郵便局などにおきましては、手持ち受信機をできるだけ活用して、国民もれなく厳肅なる態度で賢き御言葉を拝し得ますようご手配願います。ありがたき放送は正午でございます。ありがたき放送は正午でございます。なお、きよつ新聞は、都合により午後一時ごろ配達されるところもあります。」

- 『放送夜話 座談会による放送史』(日本放送協会編、日本放送出版協会、一九五八年)所収。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- 読みやすさのために、適宜ひらがなを漢字に変更した。その場合、振り仮名をつけた。
- PDF化にはLATEXでタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを

ラジオ温故知新(<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/index.html>)
に

ラジオの回路図を

ラジオ回路図博物館 (<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>)
に収録してある。参考にしよう。